

社会情報学部開設20周年にあたり(20周年記念特別号)

著者名(日)	伊藤 朋恭
雑誌名	大妻女子大学紀要. 社会情報系, 社会情報学研究
巻	21
ページ	iv
発行年	2012
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00005739/

社会情報学部開設20周年にあたり

大妻女子大学

副学長 伊藤朋恭

社会情報学研究（紀要）の10周年記念号が刊行されたのは、つい数年前のように感じますが、早いものであれからまた10年の歳月が経過し、この度社会情報学部開設20周年の記念号が刊行される運びになったとのこと、改めてお祝いを申し上げます。厳しい環境のなかで日夜頑張っておられる、東明佐久良学部長を始めとする諸先生方のご尽力に、心から敬意を表する次第です。

振り返ってみますと、初代学部長・故磯田 浩先生のもとで、多摩キャンパスに全国で2番目の社会情報学部が設置されたのは1992年のことでした。ちなみに社会情報学部設置の第1号は、その1年前の札幌学院大学であり、その後同名の学部が全国いくつかの大学に設置されたことから見ても、本学として当時の社会情勢を機敏に読み取った設置だったのだと思います。当時は社会情報学という用語自身がまだ耳新しく、専任教員の多くが、それまでの自分の専門領域とのつながりを視野に入れながら、この新しい領域の方向性を手探りしていたように記憶しています。私も、設置当初から社会情報学部にお世話になりましたが、それまでの前任校での経験とは全く異なり、同じフロア内で理系の私とは分野が異なる多くの先生方と接触する場を持つことができ、新しい人生が始まったような感覚にとらわれたものでした。学部全体としても、期待感を込めたフレッシュな感覚に満ち溢れていました。

そのような状態の中で、「情報」をキーワードとする、社会科学と自然科学の融合する新しい学部として、幸いにも優秀な多くの受験生を集めて出発することができ、また卒業時にも本学他学部に負けない就職率を確保することができました。それを踏まえて第1回日本社会情報学会大会の開催校を引き受けるなど、わが国における社会情報学の旅立ちにも関与いたしました。

1996年には大学院社会情報研究科（現「人間文化研究科現代社会研究専攻」の前身）も設置され、学生の勉学意欲を満たす態勢がさらに整備されました。また多摩キャンパスとしては、1999年に短期大学部が廃止となりましたが、それに代わって人間関係学部と比較文化学部が新設され、多摩キャンパスは千代田とは異なりいずれも学際的な3学部体制として新たな出発をすることになりました。

ただ今後の社会情報学部の発展のために、自戒の意味も込めてあえて付言させていただきますと、この頃から社会情報学部は伸び悩みの状態にあるように感じます。社会科学と自然科学の融合という理念を現実にもどどのように活かすかと言う難しさと共に、やはり多摩キャンパスと言う立地の影響は無視できないと思います。20世紀最後の四半世紀を振り返ってみますと、広々として素適な欧米の大学町のイメージとの重なりもあり、各大学はこぞって郊外にキャンパスを構えました。しかしその後少子化による18歳人口の減少が本格化するに伴い、受験生の選択眼も厳しくなり、次第に郊外型キャンパスが敬遠され、再び都心型キャンパスに人気が集まる傾向が出てきました。加えてバブル経済の崩壊による都心用地価格の下落や、首都圏既成市街地工場等規制法の廃止による大学用地取得制限の撤廃により、各大学はキャンパスの都心回帰にその命運をかけるようになりました。

本学でも現在千代田キャンパスにおいて、興和ビル用地の取得に始まる一連の用地拡張が予定されており、今後多摩キャンパスとの関係が注目されるところです。社会情報学部としても思い切った展望策を検討し、今後のさらなる発展を図られることを祈願しております。